

## 書評・新刊紹介

熊野 茂 著

### 「世界の淡水産紅藻」

xiv + 395 ページ, 内田老鶴圃, 2000年6月刊  
28,000円+税

藻の分類研究の世界を眺めると面白い現象に気づく。研究手法のちがいや研究のしやすさ、しにくさ、または種類の多い少ないもあるので、当然と言えば当然であるが、海産では大形藻、つまり海藻を研究する人口が多いが、微細藻は少なく、逆に淡水産では微細藻の研究者は多いが大形藻では少ない。それに、海産・淡水産ともに大形藻の研究者は微細藻には手をつけず、逆に微細藻学者は大形藻を遠慮する傾向がある。

本書の著者熊野茂博士は神戸大学理学部に永年勤務し、同大学の故広瀬弘幸教授の指導で藻学を修めた淡水藻類全般をこなす研究者であるが、特に種の識別のはなはだ困難な紅藻カワモズク属の研究をライフワークとして業績を挙げて来られた数少ない淡水産大形藻を得意とする藻学者である。そして本書は同博士のライフワークの集大成でもある。

1998年8月のある日、予め来訪の連絡があった熊野博士が膨大な原稿を持って私が勤務する千葉市の県立中央博物館に来られた。原稿に目を通して欲しいとのことである。原稿は400頁を超える大部のもので全編英文和文併用で書かれ、それは全世界の淡水産紅藻200余種を網羅し、それぞれの種には克明な記述と図や写真が添えられている。熊野博士が淡水産紅藻の大著に取り組んでおられることは聞いていたが、持参されたそれは正直言って私の予想をはるかに超える大部のものであった。この原稿をしっかりと校閲出来る学者は世界でもそう多くはないであろう。かつて同室で藻類の研究を共にしたカリフォルニア大学バークレイのP.C. Silva博士の顔が浮かんだ。現在、藻学分野において考証の確かさではSilva博士の右に出る者は先ずいないと言ってよいだろう。忙しい学者であるが、この分野の考証の確かさでやはり定評のあるR. Moe博

士が現在傍らにおられるので、きつと要望に答えて下さるに違いない。その後、話しは順調に進み、後に熊野博士が渡米して互いに直接顔を合わせて議論や検討を行うなどの経過があり、かくして世界で最初の英・和文の「世界の淡水産紅藻誌」が出来上がった。日本の藻学者・熊野茂博士による、世界の藻学界にとっても記念すべき論文の完成である。本書は出版社の要望により、和文の部分のみを印刷した「日本語版・世界の淡水産紅藻誌」である。

本書は、目次に続いて「世界の淡水産紅藻研究の歴史」が5頁に亘って概説され、次いで「収録した属の検索表」が2頁に亘って付される。本書の基幹部となる「紅藻の分類群の記述」はそのあと317頁に及ぶ。ここで扱われる分類群は9目、16科、28属、218種・変種などで、目・科・属には簡潔な定義と基準となる科名、属名、種名が記され、さらに科ごとに属と種の検索表、または属、あるいは属のグループ(群)ごとに種の検索表が添えられているので、調べようとする藻がどの仲間かの見当をつけるのに大変便利である。さらにこの本にふんだんに盛られている種の特徴を示す図や写真はこの分野に馴染みの薄い読者に種の記述を理解しやすくさせ、それは種を同定する際の大きな助けとなっている。巻末の「命名に関する略語(holotype 正基準標本; synonym 同物異名, 異名などの解説)」、「標本室略号(SAP-北海道大学理学研究科標本室, UC-カリフォルニア大学・バークレイ校標本室など)」、「淡水産紅藻の学術用語集(日本語-英語の部: 果胞子-carpospore; 単軸性-uniaxial など)(英語-日本語の部: carposporophyte-果胞子体; gonimoblast filament(s)-造胞糸など)」はさらに読者の便を図ったもので、初心者には有難い。最後に、およそ1999年までの淡水産紅藻の分類と分布に関する文献900編近くが網羅され、そのあと学名索引と和名索引が11頁に亘ってリストされている。

「はじめに」の項で著者も記しているように、地球規模での環境の悪化が進む昨今、指標植物として水圏の環境変化の monitoring 機能をもつ淡水産大形藻類の役割は実に大きい。しかし、まとまった分類の本がなかったこともあって、淡水産紅藻の多くは指標植物に取り上げにくい面があった。本書の出現はこの問題解決にタイムリーな一石を投じてくれた。本書はまた急速に発展しつつある淡水産紅藻の分子分類学へ基盤整備を与えたもので、この点においても実にタイムリーな刊行である。藻分類の研究者に限らず、藻類を研究の

材料に使う者、学校の教材にする者、環境、特に水圏の環境問題に携わる者など、広く藻類の調査研究または教育に関わる者には座右に置くことを奨めたい。環境保全・自然保護等にかかわりをもつ大学、研究所や企業等の図書室・研究室にも備えたい本である。

なお、散見される誤植等については、本書を購入した旨の連絡が出版社へあり次第正誤表を送るとの由である。

千原光雄（千葉県立中央博物館）

熊野 茂 著

## 「世界の淡水産紅藻」

xiv + 395 ページ，内田老鶴圃，2000年6月刊  
28,000円＋税

世界中で4000種とも5000種ともいわれている紅藻植物のうち、淡水域に産するものの割合は5%程度であろう。とはいえカワモズクなどのように生活史の面から見ても独特の特徴をもつ群を含んでいる。淡水産紅藻の多くの種は泉の湧水やそれから流下する清澄な水域の限られた水質条件の場所にだけ生育していて、環境汚染に極めて敏感である。環境庁が発表したレッドリストのなかにも、シヤジクモ類と並んでいくつもの淡水産紅藻の名が挙げられているように、日本の多くの場所で存続が危ぶまれている種が多数あり、オキチモズクのように原産地では絶滅したものもある。しかし他の淡水産の生物と同様に、調査が不十分で生育状況に関する情報は少なく、カワモズク類のように種の査定が困難な分類群があって、纏まった研究書が待ち望まれていた。

淡水産紅藻類もヨーロッパにおいて研究が開始され、リンネの頃にはすでにいくつかの種が認識されていた。日本では斎田功太郎氏のカワモズクの生活史についての論文(1887)がもっとも早いものであろう。そして Sirodot の大著 *Les Batrachospermes* などを参考にしながら森通保氏など数人の研究者によって徐々に知識が増加してきた。1950年代以降、南北アメリカ大陸、中国、オーストラリアなどでも分類学的な研究が進

み、多数の新しい属や種が知られるようになってきている。

淡水産紅藻の世界中の種を網羅して研究の現状を纏めたのが熊野茂氏の「世界の淡水産紅藻」である。このなかで28属213種について、検索表とともに記載を与え、大部分の種について原記載にともなう図解やその他の文献の図解を加えている。種類の半数を占めるのがカワモズク属 *Batrachosperum* で、属内分類群についても詳しく解説され、研究者によって異なる意見も取り上げている。そのほか日本には無い *Lemanea* などいくつかの属についても図解が豊富で形態の概要を知ることができる。淡水産といっても、汽水域に分布の中心があるアヤギヌ属 *Caloglossa* やコケモドキ属 *Bostrychia* も加えている。これらが日本語の解説で読むことができるのは、われわれにとってありがたい。術語の解説も理解を助けるのに大いに役立つだろう。詳細な文献表はこれから研究を始める人にとってきわめて有用であろう。

著者の熊野茂氏は神戸大学において故広瀬弘幸教授の下で研究を続けてこられた。紅藻類だけではなく、広く淡水藻類全般にわたって勉強されている。カワモズクに関心を持ち始められた頃だと思うが、小石川の植物園内の池に大学院の学生だった私も一緒に採集に行ったことが懐かしく思い出される。その後、熊野氏は日本国内はもとより、マレーシアをはじめとして多くの国や地域での現地調査によって新しい知見を明らかにされ、さらにパリの自然史博物館などにおいて標本の調査を進められた。この著書の執筆にあたっては Berkeley の P.C. Silva 博士の意見も取り入れて遺漏のないように努められた。この種の著作にもっともふさわしい研究者である。

「世界の淡水産紅藻」を多くの方が利用され、日本の淡水藻類の調査研究がさらに進展することを強く期待している。陸の植物と違って人の目に触れることが少ない藻類についても、生育の現状と将来にわたっての変動を明らかにすることが出来る情報を集めて欲しいものである。

このように専門性の強い著書の出版を引き受けられた内田老鶴圃の内田悟社長の熱意に敬意を表する。

吉田忠生（北海道大学名誉教授）